

天寿国と重興仏法の菩薩天子と

礪波護

はじめに

一九九九年一月、拙著『唐代政治社会史研究』の第Ⅳ部〈仏教と国家〉に「唐初の仏教・道教と国家——法琳の事跡にみる——」を加えた、『隋唐の仏教と国家』（中公文庫）の刊行に際し、その二年前に執筆の「隋唐時代の中国と日本の文化」^①と題し、「日出づる国からの使節」「隋の文帝、仏教を復興」と「遣隋使・遣唐使が将来した文化」の三節からなる概論を巻頭に冠した。その「隋の文帝、仏教を復興」で、仏教が中国社会で勢力を拡大させるにつれ、四王朝の四皇帝による四大廢仏、いわゆる〈三武一宗の法難〉の直後に、つぎの王朝または皇帝によって、人心収攬をも意図した仏教復興政策がとられた史実を強調した。

まず、第一回目の北魏の太武帝による廢仏の直後に行われた仏教復興事業の一環として開削されたのが雲崗石窟であることに言及した後、つぎのように書いた。

第二回目の廢仏は、儒教の聖典『周礼』を尊んだ北周の武帝により、五七四年と五七七年の二度にわたって断行され、仏教のみならず、道教も廢されました。仏像などがこわされ、沙門たちは還俗させられました。まもなく北周王朝は滅び、外戚の楊堅が隋王朝を開きます。この楊堅こそ、小野妹子が「海西の菩薩天子」と呼んだ、隋の文帝そのひとなのです。（二七頁）

ついで、長安で即位した隋の文帝が打ちだした新政策、『周礼』に基づく官制を廢止して漢魏の旧制を復活させ、仏教と道教に対する禁圧を撤回し、無宗教政治の下に潜伏

していた人びとの不満を解消したことに触れた上で、

文帝は、仏教と道教に対して大弾圧を断行した北周の武帝を反面教師とみなし、当初は仏教と道教を平等に再興する宗教政策をとっていました。しかし幼名を仏教の保護者を意味する那羅延といい、般若尼寺で養育されたという誕生説話をもつ文帝は、しだいに仏教に熱中しだし、宮中で菩薩戒をうけさせし、晩年には国内各地に舍利塔を建造しました。文帝が在位した二十四年間に、得度した僧尼は二十三万、建立した仏寺は三七九二もありました。(一八頁)

と総括した。また文帝の没後に即位した煬帝については、煬帝は、皇太子になる前、江南統治の責任をになつたとき、天台宗の開祖智者大師から菩薩戒を受けていました。そのせいか、文帝ほどには仏教に偏重した宗教政策をとりはしなかつたものの、〈三韓〉すなわち朝鮮三国と倭からの留学生を指導し教授するために、特別の高僧を勅命で任用し、鴻臚館に外国僧教習所ともいうべき施設を設けたのです。それらの隋の高僧として、浄業・静藏・靈潤らの事績が『統高僧伝』に記載されています。(一九一—二〇頁)

と論じたのである。

「隋唐時代の中国と日本の文化」を執筆するに当たり、大橋一章の名著『天寿国繡帳の研究』(吉川弘文館、一九九五年)を紐解き、とりわけ「第六章 天寿国の解釈」の綿密な学説史に感銘をうけ、また「西方天寿国」の唯一の文献とされる敦煌写経、三井文庫蔵の華嚴経卷第四十六の卷首と巻尾のカラーの写真図版に瞠目したにも拘わらず、「西方天寿国」について全く言及しなかつたのは、写経の真偽について疑惑を抱いていたからで、偽写経に基づいての立論を論評することに気が進まなかつた。

ところが、二〇〇〇年八月に奈良国立博物館の特別展観「国宝中宮寺菩薩像」に三井文庫蔵の華嚴経が出陳され、翌年十一月には、大橋一章の業績を中核に据えた、NHKのテレビ番組、歴史ドキュメント《隠された聖徳太子の世界》復元・幻の「天寿国」が放映された。まもなく大橋一章・谷口雅一『隠された聖徳太子の世界——復元・幻の天寿国』(NHK出版、二〇〇二年)が刊行され、天寿国は阿弥陀浄土であつて、聖徳太子が憧れた中国の菩薩天子は隋の煬帝である、という説が喧伝されるに至つた。そこで、三井文庫蔵の華嚴経は偽写経であつて「西方天寿国」は存在せず、仏法を重興した海西の菩薩天子は隋の文帝であるという私見と論拠を述べることにしたのである。

一、天寿国研究小史——天寿国か无寿国か

一九三五（昭和一〇）年五月十二日、第三六回史学会大会の第二日目、三井家が珍襲してきたもののうち、史学の資料となるべき三八点を出陳する三井家什宝展観が、麻生区筭町集会所において開かれ、史学会編『第三十六回 三井家主催展覧会図録』が刊行され、同時に「船首王後墓志銅版拓影」と「唐銀鋌影印」との二枚が紙筒に入れて配布された。第一室には、国宝の元永本『古今和歌集』を始め、「船首王後墓志銅版」「唐銀鋌」や敦煌出土と銘打った仏典八点が並べられた。仏典の二番目が「八華嚴經 卷第四十六 北魏延昌二年写 一卷」であり、図版に卷末八行と奥書の写真が掲載された。その解説文には、

首部欠損。発端「利海微塵等」。黄紙墨野墨字。紙数現在十六張。卷末に、「延昌二年経生和常太写用紙十九」とあり、更に別筆にて「大随（隋）開皇三年歳在癸卯五月十五日」納経発願の奥書がある。延昌二年は北魏宣武帝即位十五年（五一三）わが継体天皇七年。一千四百二十三年前。開皇三年は隋楊堅帝を称して三年（五八三）。我が敏達天皇十二年。千三百五十三年前に当る。

と書かれていた。行文の都合上、写真に即して奥書の部分を移録しておこう。

大随開皇三年歳在癸卯五月十五日。武侯帥／

都督・治會稽縣令宋紹演、因遭母／

喪、亭私治服、發願華嚴經一部・大集經／

一部・法華經一部・金光明經一部・仁王經一部・／

藥師經卅九遍。願國王興隆、八表歸一、／

兵甲休息。又願亡父母託生西方天壽國、／

常聞正法。己身福慶從心、遇善知識。／

家眷大小康休。一切含生、普蒙斯願。

この華嚴經写経が紹介されるや、北魏延昌二年の古写経という点よりも、隋開皇三年五月の宋紹演の納経発願の中の「又願亡父母託生西方天壽國、常聞正法」とある文面により、学界の注目を浴びることになった。すなわち、願文の「託生西方天壽國」が、奈良斑鳩の中宮寺伝来の天壽國中「とあつた文言との類似に関心が寄せられたのである。

三井文庫蔵の華嚴經写経の奥書に最初に言及したのは、常盤大定であった。常盤は先ず一九三六（昭和一一）年刊の『仏教考古学講座』（雄山閣）第一巻經典篇に収める、「大藏經概説」の「単行本」の条で取上げ奥書を移録し、

一九三八年には、三月刊の『後漢より宋齊に至る訳経総録』(東方文化学院東京研究所)の図版として、この華嚴経卷第四十六の奥書の写真を掲載し、六月に『支那仏教の研究第一』(春秋社刊)を出版した際も、巻頭に奥書の写真を玻璃版として掲げるとともに、「天寿国について」と題する章を設けてほぼ同じ趣旨を述べた。

常盤『支那仏教の研究第一』によると、「或は無寿国でないかの説もあるとの事であるが、この奥書のもとは判然天寿国である」と断つた後、「この託生西方天寿国は、西方とある以上西方浄土である事が、容易に想定せられる。予は一層之をたしかめんが為に、北魏より北齊・北周・隋に互る間の造像銘文を取調べて見て、其中に於て、明白に往生信仰の表はれて居るものを選び出して、少くも五十六個を得た」(二〇二頁)と述べ、開皇三年の奥書と頗るその文句の類似しているものは、次の二個であるとして、東魏天平四年(五三七)の「託生西方妙樂世界、不逕三塗、値仏聞法、一切衆生、咸同斯福」と、東魏武定元年(五四三)の「託生西方妙樂国土、生生世世、値仏聞法。……」を引用した。出典は明示されていないが、大村西崖『支那美術史彫塑篇』(仏書刊行会図像部、一九一五年)本篇の二五五頁と二六四頁に著録された石刻銘文に該当する。

常盤は「以上の五十六例を以て、往生信仰の明白なものは尽きる。之を通観するに、西方の信仰は断然優位を占めて居る。是等多数の類例を掲げ来る時は、天寿国の曇茶羅は、開皇三年の奥書に見られる西方天寿国のそれであり、而して西方天寿国は西方妙樂国土であるに相違ない」(二〇四頁)、と結論したのである。

これに反駁したのが大屋徳城で、先ず『寧楽仏教史論』(東方文献刊行会、一九三七年)一二二—一二三頁で疑問点を指摘し、次に「最近の天寿国問題に就いて」(『密教研究』七〇、一九三九年。のち『日本仏教史論攷』へ大屋徳城著作選集)、国書刊行会、一九八九年に再録)を書き、常盤の言う「西方天寿国」は「西方无寿国」と読むべく、「西方无量寿国」の量の字を落したものである、と述べつつ、持論の天寿国靈山浄土説を確認している。

一九三九年十二月三日に三井家の筭町集会所を会場として開催された第二五回の東京大藏会に、華嚴経卷第四十六を含む三井文庫襲蔵の敦煌出土、六朝・隋・唐の写経三三点が展観され、一〇点の図版を含む、B6判の展観目録が作成された。参加した横超慧日は、当日の拝見記を昭和十四年十二月七日付『教学新聞』(教学新聞社発行)に寄稿し、問題の華嚴経卷第四十六の奥書を特に取上げ、

常盤博士は嘗てこの奥書に基いて、従来定説を見なかつた聖徳太子の天寿国なる信仰が確に西方浄土なるべきを論証せられたが、吾人の見る所では天寿国の天の字がどうしても无の字のやうに思はれてならぬ。従つて常盤博士の説に一步を進め无寿国は無量寿仏国の略と解して「願はくは亡父母西方浄土に託生せん」と読みたが、西方天寿国と読まねばならぬ理由が別にあるか知らん。

と述べていた。

「西方无寿国」と読むべしとした大屋と横超の説に対して、否定したのが岡部長章で、新たに写真撮影そして赤外線感光の乾板を用意しての撮影を行なった上で、「三井家蔵華嚴経奥書の即物的考察」(『日本歴史』一二〇号、一九五八年)と「天寿国問題の真相と開皇の清信士宋紹演の願文」(『書品』九一号、一九五八年)を発表し、「西方天寿国」と読むべきであると論じた。

さきに言及した大橋一章『天寿国繡帳の研究』の「第六章 天寿国の解釈」は、鎌倉時代以降に提案された数多の解釈を丁寧に跡付け、無量寿国説と弥勒の兜率天説の二説が有力とした上で、最終的に無量寿国説に左袒している。

しかし、三井文庫蔵の華嚴経奥書が紹介されて以後、常盤

を始め大屋・横超・岡部、そして大橋に至るまで、誰も問題の華嚴経奥書が贋物、すなわち近代作成の偽写本であるとの疑問を抱きはしなかったのである。

敦煌出土とされる三井家蔵華嚴経の真贋については次節以下で検討するとして、奥書に記された文言が「西方天寿国」なのか「西方无寿国」なのかに関しては、近年、三井文庫の全面的な協力体制のもと、写本の現物に即して筆跡鑑定した専門家の石塚晴通と赤尾栄慶は、「西方无寿国」と判定した。お二人の鑑定結果を私は尊重する。

二、宋紹願経の七部経に華嚴経は含まれない

一九五六(昭和三一)年に、大英博物館所蔵のスタイン将来敦煌文献の焼き付け写真が京都大学人文科学研究所に届き、藤枝晃が関西一円の研究者を鳩合した共同研究班を組織した。翌年には、ジャイルズ編『大英博物館所蔵敦煌写本解説目録』^②が刊行され、三井家蔵華嚴経の奥書「大随開皇三年。歳在癸卯。五月十五日。武侯帥都督前治会稽県令宋紹演」をもつ願経と密接に関連するものとして、すでに矢吹慶輝の『鳴沙余韻』(岩波書店、一九三三年刊)に図版90-IVとして紹介されていた、奥書に隋の開皇三年の武侯帥都督宋紹の名の見える願経『大集経』巻第十八が、

目録番号一五八九（いわゆるスタイン本三九三五号）として解説されたばかりか、仏弟子宋紹の願経『大集経』巻第廿五が、目録番号一五九二（スタイン本五八二号）として解説された。ジャイルズの解説目録には、『大集経』二点に付された宋紹の奥書を移録されたのである。

二つの願経の奥書を写真に即して移録しておく。

※大集経巻第十八の奥書（スタイン本三九三五号）

開皇三年歳在癸卯五月廿八日。武侯帥都督／

宋紹、遭難在家、爲亡考妣、發願讀／

大集経・涅槃経・法華経・仁王経・金光／

明経・勝曇経・薬師経各一部。願亡者／

神遊淨土、永離三塗八難、恆聞佛法。／

又願家眷大小、福慶從心、諸善日臻、／

諸惡雲消。王路開通、賊寇退散、疫／

氣不仵、風雨順時。受苦衆生、速蒙／

解脱、所願從心。

※大集経巻第廿五の奥書（スタイン本五八二号）

佛弟子宋紹讀七部經、所願／

從心。

前者には武侯帥都督の宋紹が亡くなった考妣つまり父母の為に大集経を始め涅槃経・法華経・仁王経・金光明経・

勝曇経・薬師経の合わせて七経を読み、亡父母の神が淨土に遊んで、つねに仏法を聞くことを願い、最後に受苦の衆生が速やかに解脱を蒙り、所願從心ならん、と書かれている。後者の奥書に仏弟子の宋紹が七部経を読み、所願從心ならん、とあるのは、前者の要点を記したものである。

開皇三年五月廿八日の前後に、宋紹が亡父母の為に読んだのは七部経、すなわち大集経・涅槃経・法華経・仁王経・金光明経・勝曇経・薬師経の七経であり、涅槃経と勝曇経はあるが、三井文庫蔵のような華嚴経は含まれていなかったし、六経でもなかったのである。

ちなみに、藤枝晃は無紀年の敦煌写経の年代鑑定に役立つべく、『墨美』第九七号（一九六〇年）〈敦煌写経〉特集を編集した。本文「敦煌写経の字すがた」に続いて、図版「スタイン収集中の紀年敦煌写経三三例」を選択した際、一三例目として三九三五号『大集経』巻十八を選択したのみならず、その奥書を巻末の「四三四 奥附選影」の一つとして選んだ。この宋紹の願経を藤枝が解説した時、三井文庫蔵の宋紹演の願経『華嚴経』に言及しなかったのは、真偽の判断に躊躇していたからであろう。^③

ところで、一九六〇年春から藤枝主宰の敦煌写本研究班に出席していた私は、二十年ばかり後に、唐の高宗朝から

玄宗朝にかけての、中国社会における仏教の受容の実態を考察する論考「唐中期の仏教と国家」(福永光司編『中国中世の宗教と文化』京都大学人文科学研究所、一九八二年刊、所収。のち礪波護『唐代政治社会史研究』(『東洋史研究叢刊之四十』)同朋舎、一九八六年刊および『隋唐の仏教と国家』中公文庫、一九九九年刊、に再録)を執筆して、第一次史料である当時の写経の跋文奥書と造像銘文を検討し、学界の通説に再吟味を加えた。

その際、隋唐初の紀年をもつ敦煌将来の写経跋で、無量寿仏や阿弥陀仏に言及するのは浄土教經典のみには限らないことや、中国撰述経であるスタイン本四五六三号『大通方広経』巻上の隋・仁寿三年の奥書に「命過ぎし已後は、西方无量寿国に託生し(命過已後、託生西方无量寿国)」とあり、スタイン本二二三一号『大般涅槃経』巻三十九の巻末に、本文とは別筆で加えられた唐・貞観元年の奥書に「読誦して一切衆生の、耳に聞声する者をして、永く三途八難に落ちず、阿弥陀仏に見えんことを願うが為にす(誦誦為一切衆生耳聞声者、永不落三途八難、願見阿弥陀仏)」とあるのを引用した上で、

ここでは、隋の仁寿三年、西暦六〇三の写経跋に無量寿国の名がみえたのに対し、唐の貞観元年、西暦六二

七年の奥書に阿弥陀仏の名が挙げられていることに注目しておきたい。七世紀初頭、隋から唐初にかけての中国社会で、無量寿仏の名が阿弥陀仏の名におきかえられていく様相の一端が、これらスタイン本敦煌写経跋から、うかがえるわけである。

と結論したのであった(『唐代政治社会史研究』四〇九頁、『隋唐の仏教と国家』九八—九九頁)。

そして唐の高宗・武后期に『観音経』が西方阿弥陀浄土思想と結びついていた一端を、スタイン本敦煌写本の検討を通じて示した際、『守屋孝雄氏蒐集古経図録』(京都国立博物館、一九六四年刊)の二二二『観世音経』の奥書に「伏願已亡之父、託生西方妙楽浄土」とあり、亡くなった父が西方妙楽浄土に託生せんことを願っている次第がよみとれる、と書きはしたが、

本章では、各地の収蔵家の蒐集にかかる敦煌写本にはなるべく言及しない方針をとりたいたので、これはあくまでも参考文献として引用するにとどめておきたい。

と特に断った(『唐代政治社会史研究』四一五頁、『隋唐の仏教と国家』一〇七頁)のは、長年に互る藤枝の教訓を實踐したからであるが、とりわけ三井文庫蔵の華嚴経巻第四十六の奥書、「又願亡父母託生西方天寿国、常聞正法」の

文言を意識してのことなのであった。なお北京図書館蔵の敦煌写経の中に、開皇三年の宋紹の願経、大集経卷第廿六がある。すなわち、

※大方等大集経卷第廿六の奥書（北京図書館本一一二五）

開皇三年歲在癸卯五月廿八日。佛／

弟子武侯帥都督宋紹、遭難在家、／

爲亡考妣、讀大集經・涅槃經・法／

華經・仁王經・金光明經・勝鬘／

經・藥師經各一部。願亡考妣、神／

遊淨土、不經三塗八難、恆聞佛／

法。又願家眷大小康住、諸善日／

臻、諸惡雲消、福慶從心。王路開／

通、賊寇退散。受苦衆生、悉／

蒙脫解、所願從心、一時成佛。

である。しかし、これは、北京図書館善本部『敦煌劫餘録続編』（線装油印、一九八一一年）の第二葉裏に、

尾題 開皇三年歲在癸卯五月廿八日佛弟子武侯……等

字十行 疑僞

と注記されているように、所藏機関である北京図書館自体が偽写本と判定したもので、贋物であることに疑問を差し挟む余地はなからう。

三、敦煌写経の偽写本——三井文庫蔵の華嚴経奥書

一九九〇年に池田温は『中國古代寫本識語集録』（東京大学東洋文化研究所）を刊行し、五節からなる解説の文章を執筆した。その「五 存疑の問題」で、敦煌写本の真偽の鑑別に関して、日本国内にある敦煌蒐集とされる写本の九五パーセント以上が偽物、とする藤枝の所見を紹介した。池田は、日本にある敦煌写本の真偽比率についていえば、藤枝の判定ほど偽が圧倒的ではなく、真品が相当存在すると述べた。そして真偽に問題を含むとみられる百余件の写本には表題の下に〈疑〉を加えつつ移録し、

本書では既に学界に知られた資料は真偽を問わず蒐録する方針で臨んだ。現在中国古写本の研究はなお草創の段階にあり、基礎的整理が甚だ不十分な状態にある。真偽の鑑別についても今後なさるべき作業が少なからず、その為には関係資料を見やすい形で提供する事が有益と判断した結果である。（二七頁）

との見解を示した。池田は自ら編纂した『敦煌漢文文献』（講座敦煌5）大東出版社、一九九二年）の「敦煌漢文写本の価値——写本の真偽問題によせて——」^④の章で、敦煌写本の偽物、真偽鑑別について、その見解を敷衍する。

ちなみに、三井家蔵華嚴經卷の宋紹演願經と、スタイン本三九三五号及び北京図書館一一二五の大集經の宋紹願經の願文の箇所は、黃徵・吳偉編校『敦煌願文集』（岳麓書社、一九九五年）八四七―四九頁に著録される。三井家蔵華嚴經の宋紹演願經の奥書を移録するに際しては、「又願亡父母託生西方無〔量〕寿国、常聞正法」として、「量」原脱、という校記を付し、「西方天寿国」という説を無視している。また北京図書館一一二五の大方等大集經については、『敦煌劫餘録続編』と『中國古代寫本識語集録』が偽と判定していたという校記を付している。

ついで劉長東『晉唐彌陀淨土信仰研究』（巴蜀書社、二〇〇〇年）の「第三章 彌陀淨土信仰的興隆期——隋代」の「第三節 隋代彌陀淨土的信仰表現」では、隋朝皇室と彌陀淨土信仰の關係を論述し、ついで隋朝官僚階層の中で彌陀信仰に關係あつた者として、宋紹演（或宋紹）の項を掲げて考察した際も、『敦煌願文集』に依つて、「又願亡父母託生西方無〔量〕寿国、常聞正法」と移録している。

敦煌發見の古写本の真偽問題にやや冷淡だった中国の学界、出版界も、二十一世紀が幕を開くやいなや、関心を示し始めた。まず敦煌藏經洞發見一百年を記念する国際學術研討會論文集である郝春文主編『敦煌文獻論集』（遼寧人

民出版社、二〇〇一年）が刊行されたが、その巻頭の榮新江「敦煌藏經洞文物的早期流散」の「1. 延棟旧藏」に、三井家に敦煌經卷が購入される経緯が、明らかにされた。

榮新江によると、敦煌藏經洞を發見した王道士は、早い時期に一箱の經卷を安肅道道台である滿人の延棟に献上したが、延棟はあまり興味を示さず、かれの側近の人たちの間に分散した。延棟旧藏の敦煌寫經數百卷を入手した人物の筆頭が張広建（一八六七―？）で、遅くとも一九二九年以前に白堅（一八八三―？）の手を経て、三井家に売却された。従つて、三井文庫所藏の寫經一二二件の大多数は佳良なのである、と。本書には敦煌文獻の真偽に關する日本人の論文二篇、すなわち赤尾榮慶「關于偽寫本的存在問題」と石塚晴通「敦煌寫本的問題点」が掲載されている。

また榮新江「敦煌學十八講」（北京大學出版社、二〇〇一年）の「第十八講 敦煌寫本的真偽辨別」では、藤枝の所說の行き過ぎに注意を喚起し、特に李盛鐸（一八五八―一九三七）の旧藏にかかる敦煌寫本について、生前に所藏していたものは真品で、李自身は偽造に關与しなかつたと、死後に旧藏の善本は北京大學圖書館に購入されたが、その際に印章を購入せず、古書店の手に入り、店主が高値をつけるために古書や敦煌寫本に捺印した結果、李盛鐸の

蔵書印の捺された大量の偽造品が出現した、と述べた。

二〇〇三年に、三井文庫蔵の華嚴経に関する研究史上、画期的な成果が公表された。赤尾栄慶の編著である『敦煌写本の書誌に関する調査研究——三井文庫所蔵本を中心として——』（京都国立博物館、科学研究費成果報告書）と

赤尾「書誌学的観点から見た敦煌写本と偽写本をめぐる問題」〔佛教藝術〕二七一号（特集 敦煌学の百年）である。

前者巻頭の赤尾「調査概要」によれば、二〇〇〇年度から三カ年に亘り、敦煌写本一・二件の書誌学的調査を実施し、偽写本を除く写本について、一紙ごとの法量・一紙の行数・界高・簀目の数・奥書などの書誌学的データを詳しく採録した成果を纏めたものである。全体を通して、三井文庫所蔵本には、唐時代七・八世紀に書写された写本に、「長安宮廷写経」と見られる写経など、優品が数多いが、偽写本と判断された写本の中に、『大方広仏華嚴経』巻第四十六も含まれている、と特記されている。

「三井文庫所蔵敦煌写経の伝来と調査の経緯」は、三井文庫学芸員の清水実と樋口一貴による報告である。藤枝晃の研究により、敦煌写経として伝世しているものの中に偽物が多く含まれていることが明らかにされ、世界的な見直しが求められるようになった。そのような時流のなかで、

赤尾栄慶（京都国立博物館）・石塚晴通（北海道大学）・富田淳（東京国立博物館）から、タイミングよく科学研究費による調査研究の依頼があったので、館蔵の敦煌写経に徹底的な検討を加えるべく依頼を受け入れた、と述べる。

「三井文庫所蔵敦煌写経目録」によれば、全部で一一二点の敦煌写経のうち、〈存疑〉と判定されたのが七八点、華嚴経巻第四十六も〈存疑〉と判定されている。すなわち三十四点は真品であると鑑定されたことになる。〈存疑〉と判定した写本については書誌学的データを示さない方針にも拘わらず、〈参考図版〉として華嚴経も巻末の箇所と拡大部分の写真を掲げるばかりか、石塚「華嚴経巻第四十六の問題点」が特別の扱いで掲載され、中文訳が載っている。石塚の小論文のうち、前半の書誌学的データの部分などは省略して、要点を移録しておく。

手の込んだ近代の偽写本の一である。奥書にある延昌二年（五一三）の写本とするには、料紙が隋風の薄手漉樹皮紙であり北魏写本と異り、書体も北魏写本と異なる（用筆が軟毛筆デアリ北魏ノ剛毛筆ト異ル）ので、具合が悪く、問題外である。延昌奥書は本奥書であり、隋の開皇三年（五八三）の写本とすると、一見書体や字及び料紙は隋風であるが、料紙の古色が不自然で

ある。また同様に開皇三年宋紹演の奥書を有つ大英図書館S・三九三五大方等大集経卷第十八の書式(一紙長三七・五cm、二三行取)と違い過ぎるのも気懸りである。(二二頁)

『仏教藝術』の赤尾「書誌学的観点から見た敦煌写本と偽写本をめぐる問題」の本体は、「料紙と書写の形式の変遷」「真偽問題に関連した学界の動向」「偽写本と見られる具体的な例」から構成されている。そして「偽写本と見られる具体的な例」として取り上げた二点の写本の内の一点が、三井文庫所蔵の『華嚴経』巻第四十六なのである。赤尾は、この写経の紙色がスタインやペリオコレクションの写本とは明らかに違う不自然な濃い褐色系の紙色であること、料紙の法量が縦は二十六・五センチ、横は四十五・一センチから四十七・四センチであり、一紙に書写されている行数は基本的には二十八行で、このような形式は一般的には七世紀以降に見られるなどを指摘した上で、これは六世紀の写本ではなく、二十世紀初頭に造られた偽写本と判定せざるをえない状況である、と判定している。

石塚と赤尾による鑑定の記事は、ともに説得力がある。

この三井文庫蔵の華嚴経は、一九三五年に始めて識者に公開されてから足掛け七十年。その間、奥書の文言の判読と

解釈を巡って論争が繰り返されてきた。しかし手の込んだ近代の偽写経と判明したからには、今後は中宮寺の天寿国繡帳の解釈に援用されるべきではあるまい。

ところで、大橋一章・谷口雅一『隠された聖徳太子の世界——復元・幻の天寿国』の「第四章 謎の「天寿国」を探せ!」(谷口雅一執筆)では、三井文庫蔵の華嚴経の奥書を天寿国Ⅱ阿弥陀浄土説を強力に裏づける史料として用いるに先立ち、「阿弥陀浄土に往生して天寿を得る——中国山東省での発見」の節で、実見した千仏山の阿弥陀像の造像銘を移録している。これは清・陸增祥撰『八瓊室金石補正』巻二四に「大像主吳題記」として著録、顧千里旧蔵の拓本が北京図書館金石組編『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編』第九冊(中州古籍出版社、一九八九年)八三頁に収録されているものである。阿弥陀像一軀を造って、衆生が天寿を保つことを願ってはいいるが、ありふれた(天寿)という文言があるからとて、この造像銘で天寿国Ⅱ阿弥陀浄土説を裏づけるのは強引すぎるであろう。

四、重興仏法の菩薩天子は隋文帝である

大橋一章と谷口雅一の共著『隠された聖徳太子の世界』は、お二人によるプロローグ対話とエピローグ対話の外、

本体は全九章からなり、大橋が四章分を、谷口が五章分を分担執筆していて、「第八章 聖徳太子にとつて天寿国とは何か」は第四章と同じく、谷口が執筆している。その冒頭の「聖徳太子が憧れた中国の菩薩天子」で、聖徳太子が六〇七年に国書を送った中国の皇帝、「海西の菩薩天子」とは誰のことなのかにつき、研究者によって、隋の初代皇帝文帝を指す人もいれば、二代煬帝を指すという人もいるが、今は断然、煬帝説をとると書いた上で、つぎのような議論を展開している。

たとえば、こんなデータがある。仏教經典の整備・写本九十万三千五百八十卷、古像の修理十万千体、新像の鑄刻三千八百五十体。これは煬帝が、その治世十年の間にを行った仏道実践の数である。ちなみに、經典の写本に関しては文帝二十四年間の治世でも、煬帝の七分の一の数ではない。

文帝が篤い仏教信者だったことは確かだが、煬帝はそれ以上に篤い信者だった。云々。(一六五頁)

谷口はデータの論拠となる原典を提示してはいないが、「護法菩薩」の再来と称された隋唐初の法琳撰『辨正論』巻三・十代奉仏篇上の隋の記事であり、煬帝の条には、

平陳之後、於揚州、裝補故經、并寫新本。合六百一十

二藏、二萬九千一百七十三部、九十萬三千五百八十卷。修治故像一十萬一千軀。鑄刻新像三千八百五十軀。所度僧尼一萬六千二百人。

とある。しかし、文帝の条には、

自開皇之初、終於仁壽之末、所度僧尼二十三萬人。海内諸寺三千七百九十二所。凡寫經論四十六藏、一十三萬二千八十六卷。修治故經三千八百五十三部。造金銅檀香夾紵牙石像等、大小一十萬六千五百八十軀。修治故像一百五十萬八千九百四十許軀。宮内常造刺繡織成像及畫像、五色珠旛、五彩畫旛等、不可稱計。

〔大正藏經〕五二卷五〇九頁中段〕と書かれ、文帝と煬帝の二代合計で、「寺有三千九百八十五所、度僧尼二十三萬六千二百人」と記されている。

いかにも〈經典の整備・写本〉に限れば、文帝治世では「一十三萬二千八十六卷」、煬帝治世の「九十萬三千五百八十卷」の七分の一の数ではない。しかし国家の仏教復興政策の観点から最も肝要な〈寺院の創設〉と〈度僧尼〉の数に注目して言えば、文帝の治世の方が圧倒的に多い。また、〈古像の修理〉は文帝治世の「一百五十萬八千九百四十許軀」に対し、煬帝治世は「一十萬一千軀」であり、

〈新像の鑄刻〉は文帝が「大小一十万六千五百八十軀」であったのに対し、煬帝は「三千八百五十軀」である。同時代人の法琳（五七二—六四〇）による、この統計を目にし「文帝が篤い仏教信者だったことは確かだが、煬帝はそれ以上に篤い信者だった」と結論するのは、首肯しがたい。

この機会に、東洋史学を専攻して中国仏教史学の分野で輝かしい業績をあげた二人の先学、塚本善隆（一八九八—一九七六）と山崎宏（一九〇三—一九九二）の論考に依拠して隋の文帝と煬帝の仏教観、仏教政策の素描をしておこう。^⑥

まず煬帝については、山崎『隋唐仏教史の研究』（法藏館、一九六七年）の「第五章 煬帝（晋王広）の四道場」

「第七章 隋の高句麗遠征と仏教」の論旨を紹介する。

煬帝は仏教と道教の信者であった。晋王広の時期に揚州に僧と尼のための慧日道場と法雲道場、道士と女冠（女道士）のための玉清玄壇と金洞玄壇、いわゆる四道場をおき、『資治通鑑』巻一八一・大業六年正月の条に、帝は「その両都に在り及び巡遊するに、常に僧・尼・道士・女官を以て自隨し、これを四道場と謂う」とあるように、即位後は地方巡遊の際さえも、僧・尼と道士・女道士に頼っていた。晋王広が、五九一年に兵乱を避けて廬山にいた天台智顛（五三八—一九七）を揚州に招き、菩薩戒と総持という法名

を授けられ、智顛に智者大師の号を贈ったことは有名である。しかし、六〇四年に即位した煬帝は、高句麗遠征に先立ち、戦費捻出を意図してであろう、道世撰『法苑珠林』巻一八に引く、唐臨『冥報記』（『大正藏經』五三卷四二〇頁中段）に「大業五年、奉勅、融併寺塔」と記録するように、六〇八年に寺院融併令を発して、僧五十人未満の小寺を廃して付近の大寺に融併すると共に、僧侶の沙汰、すなわち徳業なき僧侶の還俗を命じたのである。ただし寺院融併令は六〇八年に発布されながら、緩やかに行われ、高句麗討伐の詔を發した六一〇年になって大規模に断行されたが、僧侶の沙汰は大規模には強行されなかったらしい。

次に文帝については、『塚本善隆著作集』第六卷（日中仏教交渉史研究）（大東出版社、一九七四年）の「第一 国分寺と隋唐の仏教政策並びに官寺」、及び第三卷（中国中世仏教史論攷）（一九七五年）の「第五 隋仏教史序説——隋文帝誕生説話の仏教化と宣布——」の論旨を紹介する。^⑦

前者では、隋書倭国伝の「聞海西菩薩天子、重興佛法」と密接に関連する文言が、仁寿と改元した六〇一年の六月十三日、文帝還暦の誕生日の当日に、朝廷から舍利を諸州に分布し、三十所に舍利塔を建立させた詔（『広弘明集』卷十七所引。『大正藏經』五一卷二二三頁中段）の冒頭に

「朕帰依三宝、重興聖教」とあるのを紹介、「重興仏法」は文帝一代の治世そのものをさす言辞であって、文帝の詔勅などの文中に、しばしば見られる、と述べた。

後者では、道宣『集古今佛道論衡』乙に引く王劭述『隋祖起居注』（『大正藏經』五二卷三七九頁上段）に、智仙尼により般若尼寺で養育された帝が、後に果たして山東より入りて天子となり、「重ねて仏法を興す。みな尼の言のごとし（重興仏法、皆如尼言）」とある文を紹介する。

塚本は引用しないが、王劭「舍利感應記」（『弘明集』卷十七所引。『大正藏經』五二卷二一三頁下段）に、智仙尼は北周武帝の廢仏を予想し、幼い文帝に「児は当に普天そんたの慈父となり、重ねて仏法を興すべし（児当為普天慈父、重興仏法）」と言った、と記録しているのである。

中国で仏教を受容する過程で、国家権力と仏教教団との緊張関係を象徴する、王法と仏法をめぐる論争、いわゆる〈礼敬問題〉は隋では如何に推移したのか。文帝の治世では僧に拜君親を強いるような動きは全くなかったが、煬帝は大業三年（六〇七）四月、大業律令を頒下した際、雜令の中に、沙門に帝および諸官長らを拜させる条を入れたのである。ただし大興善寺の明瞻らの猛烈な反対運動が功を奏し、帝に対して致拜せよとの令文は、遂に空文化する。

おわりに

およそ偽書や疑經といった、〈偽〉や〈疑〉という文字を含む題目を掲げた論考は、魅惑的である。中国古典籍に関する姚際恆『古今偽書考』や張心激『偽書通考』、中国仏教史の分野における牧田諦亮の『疑經研究』、日本仏教史分野での藤枝晃の『勝鬘經義疏』偽撰説や、河内昭圓の『三教指帰』偽撰説、また千本英史らによる日本古典文学における偽書の系譜の研究は、私には興味深く且つ有益である。だが、本稿のような、二十世紀に中国で造られた、敦煌写本の贋物・偽物を話題にするのは、気が重かった。

しかし、NHKテレビの教養番組の影響は甚だ大きく、二〇〇一年十一月に歴史ドキュメント「隠された聖徳太子の世界―復元・幻の「天寿国」が放映されると、数人の方から、聖徳太子が憧れた中国の菩薩天子は隋の煬帝であるという説などについて、私見を求められた。思案を重ねた末、この機会に、三井文庫蔵の華嚴經は偽写経なので、天寿国曼荼羅^⑩の解釈に援用すべきではなく、「重ねて仏法を興した海西の菩薩天子」は隋の文帝である、という私の論拠を示そうと、本稿を書き上げたのである。

（二〇〇四年一月十八日擱筆）

付記

脱稿後の一月二十四日、三井文庫別館で二〇〇四年新春展「シルクロードの至宝——敦煌写経」を參觀した。赤尾栄慶・石塚晴通らにより真品と鑑定された写経三四点を一堂に集め、本稿で検討した華嚴経は「二十世紀初頭に造られた偽写本」と判定、参考展示されていた。同時に刊行された『敦煌写経——北三井家——』は模範的な蔵品図録である。

註

- ① 拙稿の初出は、NEXTAGE No. 50〈特集 悠久の中国〉(住友商事株式会社広報室、一九九七年五月)。
- ② LIONEL GILES: *Descriptive Catalogue of Chinese Manuscripts from Tunhuang in the British Museum*. The Trustees of the British Museum. London 1957. p.39.
- ③ 藤枝晃は、敦煌写本の真贋問題について、具体的に贗物を指摘しなかった。ただ敦煌写本研究者には関心を持ってもらうべきであるが、広く一般の人々にまで知らせるべき問題でもないと考え、京大人文科学研究所の欧文紀要に掲載の英文「敦煌写本総論」(Zinbun No. 9、一四一—一五頁)で発表。藤枝『敦煌学とその周辺』(なにわ塾叢書51。ブレーンセンター、一九九九年)四六一—五六頁及び一八三—一八五頁参照。
- ④ 池田温『敦煌文書の世界』(名著刊行会、二〇〇三年)に「敦煌漢文写本の価値」の外、予報とも言うべき「敦煌文献」について(「書道研究」五、一九八八年)も収載。
- ⑤ 本書は、先行の国際学術研究・学術調査の成果、赤尾編著『敦煌写本の書法と料紙に関する調査研究』(科学研究費成果報告書。京都国立博物館、一九九九年)を継承する。
- ⑥ 拙稿「日出づる国からの使節と留学生」(『世界の歴史6』『隋唐帝国と古代朝鮮』中央公論社、一九九七年)一一—一九頁は、多くを塚本善隆と山崎宏の業績に依拠している。
- ⑦ 塚本は「隋文帝の宗教復興特に大乘仏教振興」(『南都仏教』第三二号、一九七四年)においても、同じような見解を披露するが、塚本善隆著作集には収録されていない。
- ⑧ 拙稿「唐代における僧尼拜君親の断行と撤回」(『東洋史研究』第四〇巻第二号、一九八一年。のち『唐代政治社会史研究』同朋舎及び『隋唐の仏教と国家』中公文庫に再録)。
- ⑨ 小南一郎「偽書『中国』」(『大百科事典』平凡社、一九八四年)。牧田諦亮「疑経研究」(京大人文科学研究所、一九七六年)。藤枝晃「敦煌学とその周辺」(第三回/聖徳太子)一〇七—一三六頁。河内昭圓「三教指帰」偽撰説の提示」(『大谷大学研究年報』第四五集、一九九四年)。千本英史編著『日本古典文学における偽書の系譜の研究』(科学研究費成果報告書。奈良女子大学文学部、二〇〇三年)。
- ⑩ 勝鬘経義疏と天寿国繡帳の研究史は、大山誠一『聖徳太子』の誕生(吉川弘文館、一九九九年)及び大山編『聖徳太子の真実』(平凡社、二〇〇三年)を参照。

(本学教授 東洋史学)
〈キーワード〉隋文帝、宋紹願経、敦煌偽写経